

モノ作る心

村田 勝 敬

■ プロローグ

記紀によれば、天照大神は太陽を神格化した神だそう、皇室の祖神（皇祖神）の一柱とされている。出典怪しき伝承を探ると、天照大神は私が幼き頃に住んでいた町と満更無縁ではない。故郷の家近くにある青龍寺の城光寺縁起と土師百井の慈住寺記録に「天照大神が国見の際に冠を置かれた」と記されている。歴史に疎い私には、持統天皇や元明天皇の名を聞いても男女の区別がつかないのであるが、遠い昔を振り返ると女性が国を治めていた時代もあったようだ。

■ 神憑りの世界

秋田に赴任して間もない頃、国試対策委員を拝命した。6年生を対象とし、彼等が無事卒業するとともに医師国家試験にパスするよう、叱咤激励する係であった。当時は基礎医学棟の共用室に余裕があったので、学務課に交渉して一室を借り、10月頃より彼等が籠もって学習できるようにした。私の国試に賭けるジンクスは、願かけ後「一時足りとも、逃避するは救われず」であった。受け持った学生3名のうち、正月前に一人の学生が「実家で勉強します」と言い残して去った。試験直前まで部屋に残って勉強し続けた2名は春から初期研修医となったが、逃避した学生はその年不合格だった。

2年目は最下位の学生1名のみを担当であったが、初対面時にもう一人の同級生と連れ立って「一緒に勉強して良いですか」と尋ねた。了解の旨を伝え、さらに先程の誦文（じゅもん）を唱えた。彼等は呪縛の部屋を抜け出すことなく孤軍奮闘し、その甲斐あって合格した。その後の同委員在任中も、ここで頑張った学生に落伍者はいなかった。“究極の目的を忘れず日々励行すれば、必ずや報われる”は学生時代の読書から得たマジナイの1つである。

■ 実在の世界

医学科定員増になって以後、それまでの学生像とは異なる人種が急増しているように感じる。例えば、サークル活動は熱心であるが、授業の合間にスマートフォンばかり凝視していたヒトは試験三昧の4日目に逆ギレして教師に食ってかかった。これが人格未熟の徴候であるかどうかは判らない。ただ、人格

未熟者は社会に出てから適応障害や現代型うつ病に罹りやすいと囁かれている。

後輩思いの先輩から試験前に届けられる「過去問題集」で当座の難局は乗り越えられるかもしれない。しかし、教科書や論文を読まずして、本の中に籠められた学術のエッセンスや著者の本音をどうして理解することができるのか？ 人格未熟から脱皮するためにも、寸暇を惜しんで読書に勤しむ習慣を身につけて欲しいと思う。何故なら、様々な生き方や知恵を識ることが人間の相互理解（communication）や対処能力を高める礎だと信じて止まないからである。

■ 物書きの世界

教師の誉れは「講義が上手い」と評されることであろうが、研究者にとっては論文が唯一の評価資料となる。データ収集、実験、数値解析、そして抄録書きや発表がどれ程上手くなろうとも、科学論文を専門誌に自力で掲載させる能力を獲得しなければ一人前の研究者たり得ない。責任執筆者（corresponding author）に然りげなく要所を修正されている間は半人前なのだと自覚した方がよいだろう。

Nature や *Science* 誌は世界のトップ研究者と言わしめる雑誌であり、論文書きの目指すべき頂点と言えるかもしれない。しかし、一時脚光を浴びても再現性実験などの厳しい検証が待ち受け、かつ日進月歩の技術革新の中で新事実が次々と発表されるので、後世まで名を馳せるものは少ない。その淘汰は熾烈であり、iPS細胞論文のように医科学全体を底上げしたと賞讃されるものもあれば、STAP細胞論文のように取り下げられるものもある。一方で独創性が極度に高い場合、当該領域の査読者に理解されず掲載を



拒否されることもあり得る。これは科学の陳腐／新奇を判断するのもヒトであるからだ。いずれにしても、成功への鍵は99%の努力と1%の運である。若者は、この現状を弁えつつ、大志を抱き、その志に向かって邁進して頂きたい。その分岐点は、理屈を“知る”に留めるか、具象化する“行動”に発想を転換するかだ。すなわち、絵に描いた餅をいくら並べ立てても、そこにあるのは虚である。幾度も失敗を重ねる中で、その途上に出会す真理を見落とさないことである。

■ モノ作りの世界

学生時代のオーディオ研の先輩が東芝製真空管(球)4本、LUX製出力トランス2個、TANGO製電源トランスを送って下さった。そこで、お調子者の私はその他諸々の電子部品を昨年暮れに買い集め、オーディオアンプの製作を始めた。2010年には別の球を購入して37年ぶりにアンプを作ったが、今回は2mm厚アルミ板に穴を開ける作業もあり、還暦過ぎの身体には少々キツかった。1週間何もできない状態に陥ったが、それでも描いた回路図に修正を加えながら、ハンダ付け作業を正月挟んでおこなった。前回の製作時には電源スイッチをONにすると球内で火花が飛んだり、スピーカーから発振音や電源ノイズが出始めた。幸運にも、今回はそのような異状事態は発生しなかった。

完成した真空管アンプの透き通った音色に耽っていると、フッと、アンプ製作と論文作成の間にある何某の共通性に思い当たった。アンプ製作では、金属加工やハンダ付けを、息凝らして、コツコツ続けなければならない。抵抗器や配線コードのハンダ付け作業が中途半端だと、音は出ないで火花が散る! 一方の論文作成も、単語の選択から文章および段落の並べ方に至るまで細心の注意を払う。すなわち、文の配列あるいは接続詞の選択如何で読者に伝わる意味が全く変わってしまう(論文考察の1段落内に‘however’を2回以上使うと多重否定となり、読者は困惑する。つまり、この単語の使用は1段落に最大1回である)。即ち、両者の共通性はモノ作りである。前者は人知れず自己満足(≒非科学)の世界に浸ろうと誰も文句を言わない。これに対し、後者は人目に晒して批評の対象となる宿命を負う。とは言え、上述のような苦労話があろうとも、モノとして役に立たねば、早々にこの世から抹消される!!

■ エピローグ

1999年に男女共同参画社会基本法が「男女の人権が尊重され、社会経済情勢の変化に対応できる豊かで活力ある社会を実現することの緊要性を鑑み」施行された。日本史に出てくる天照大神は女性であった筈だが、この法律の施行前は職域、学校、地域、家庭などに男性偏重の実態があると国が認識したのである。緊要性に関しても、法律として提示しなければ、待てども男女平等は達成されないと判断した。欧米には、恰も「女性が優先される結果として、同じ能力を持つ男性が差別される」と反対解釈する偏屈者もいるらしい。兎にも角にも、政治や男女関係の世界には理屈以外の別要因(利害や感情)が入り混じるので問題解決はそう簡単でない。

科学の世界では、①結論の有意義性、②結論を導く証拠の確からしさ、③独創性、④記述の論理性などが批判的に吟味され、雑誌掲載の可否が決まる。最も嫌われるのは文章の重複と冗長である。しかし、嫌われないように…と頭でいくら理解しても、年とともにクドくなっていく自分が嘆かわしい。

「秋大生活のひろば」No.154(2015年9月刊)

